

# 分析哲学の歴史 (1)

## ——分析哲学とは何か？——

久木田水生 \*

関西学院大学 2012 年度前期 西洋哲学史 E

### はじめに

このテキストは関西学院大学文学部 2012 年春学期の「西洋哲学史 E」の講義ノートとして作成されたものである。この講義の大きなテーマは「分析哲学の歴史」である。しかし現在、分析哲学というカテゴリーに分類される哲学的実践は非常に幅広く、そのすべてを網羅することは半期のコースでは難しい。また、もしそんなことをしようとするれば過去から現在までに分析哲学者と呼ばれた哲学者の名前とその主要な業績を年代記的に列挙するだけに終わってしまうことにもなりかねない。そのような知識の列挙は最小限にとどめて、それよりもこの授業では分析哲学者たちの考え出してきた理論の実質的な内容とその面白さを知ってもらうように努めたいと考えた。そこで一つの具体的な問題を中心に据えて、その問題に対して主だった分析哲学者たちがどのようにアプローチしたかを過去から現代まで追いかけてみようと思う。その際、私たちが取り上げるのは個体指示表現の意味にまつわる問題である。

この問題を選んだ理由は、分析哲学の伝統の最も初期から現代までこの問題を巡って活発な議論が行われているということ、分析哲学における一つの典型的な方法——すなわち数理論理学による哲学的問題へのアプローチ——がこの問題をめぐる議論に顕著であることである。もちろん分析哲学が扱う主題や、分析哲学が用いる方法には他にも様々なものがある。ここで取り上げる問題が分析哲学における最重要の問題だとか、分析哲学とは数理論理学を用いるものであるなどと主張したいわけではない。しかし少なくとも分析哲学の歴史を語る上で触れないわけにはいかない、最重要の理論のいくつか——フレーゲの Sinn と Bedeutung の理論、ラッセルの記述句の理論、クワインの存在論的相対性の理論、クリプキの可能世界意味論など——はすべて個体指示表現の意味の問題を主要な動機として持ち、またその議論において数理論理学は中心的な重要性を持っている。それゆえ分析哲学の歴史を見渡す一つの視点として、この問題を中心に持ってくることは意味のあることだろうと思うのである。

分析哲学 (analytic philosophy) は、20 世紀初頭に誕生し、今日では特に英語圏や北欧において最も強い影響力を持っている哲学的潮流の一つである。また近年では南米・アジア諸国においても発展が目覚ましい。日本でも主流になっていると言ってよいだろう。それではこの分析哲学とは一体どのような哲学であり、そしてどのように生まれ発展したのだろうか。本稿ではそれを概観することにしよう。

---

\* minao.kukita@gmail.com

## 1 哲学における分析

分析哲学は主題や主張の内容によってではなく、その方法論によって特徴づけられる。伝統的な哲学者たちの多くは、精神、物体、善、神、世界などの概念について、思弁的な考察を行うことによって、理論や教説を作ってきた。その理論や教説は、彼らの宗教観や世界観に少なからず影響を受けており、従って往々にして教条的であったり、あるいは神秘主義的であったりするものである。例えば西洋哲学の伝統においては、たびたび神の存在を証明する試みがなされてきた。その証明の一つに次のようなものがある。「神は最も完全なものである。最も完全なものはすべての肯定的な性質を持っていなければならない。存在するということは肯定的な性質である。従って神は存在するという性質を持っていなければならない。」この論証においては、「神」、「完全である」、「肯定的な性質」、そして「存在する」などの言葉の意味があらかじめ了解されているということが前提である。しかし少し考えればこれは色々と問題のある前提であることが分かるだろう。神とは一体なんだろうか。神は本当に最も完全なのだろうか。肯定的性質とは何だろうか。そもそもあるものが存在するということが、このような抽象的な論証で確立されるものなのだろうか。などなど、少し考えてみれば分からないことだらけである。

もちろんこの神の存在証明には様々な反論が存在する。その中でおそらく最も影響が大きかったのはカントによる反論だろう。カントの反論は「存在する」という述語の意味に焦点を当てている。詳細は省くが「存在する」という述語は他の通常の述語とは異なり、物の概念に加えられるようなものではなく、あくまでも「事物の措定」であり、それゆえ上のような論証は成立しないと考えた。そしてこの反論は現在では一般に認められている。ここでのポイントは存在という概念についての混乱が上のような論証を正しい論証であるかのように見せている、ということである。しかしカントの言う「事物の措定」という概念もまた私たちにとって十分に明らかであるとは言えない。従って私たちがするべきことはさらに存在するという概念を明晰にすることであろう。あるものが存在するということは一体どういうことなのだろうか。私たちは通常どのような条件の物であるものが存在すると判断するのだろうか。そしてあるものが存在するということからはさらにどういうことが言えるのだろうか。このように考えるのが分析哲学である\*1。分析哲学は概念を明晰化することによって様々な哲学的問題を解決することを目指す。このときに彼らが用いるのが分析 (analysis) という方法である。

「分析」という言葉は、ある物や事柄を細かく調べて、それを成り立たせている構成要素や要因、原理、基盤を明らかにすることを意味する。たとえば化学物質を分析するということは、どのような元素がどのように組み合わさってその物質が出来ているかなどを明らかにすることを意味する。飛行機事故を分析するということは、残された機体の部分やフライトレコード、関係者の証言などを調べることによって、どのようにしてその事故が起きたのかを明らかにすることを意味する。ある人物の心理を分析するということは、彼の言動から彼がどのような心的状態にあるのか、あるいは彼がどのような行動的傾向を持っているのかなどを推測することである。文学作品を分析するということは、その作品中のある登場人物が他の登場人物とどのような関係にあるのか、あるエピソードが他のエピソードに対して、あるいはストーリー全体に対してどのような意義を持つのか、あるいはその作品中の登場人物やエピソードがどのような暗喩や寓意を持つのかなどを明らかにし、そしてそのことによってその作品の魅力や重要性を明らかにすることを意味する。

もう一つ、英語の “analysis” という言葉は数学でいう「解析」という意味も持っている。解析とは簡単に言えば幾何学的な性質を代数的に表現することである。これは幾何学的な図形を、座標空間上の点の集まりとし

---

\*1 存在概念の分析についての分かりやすい説明として、八木沢 [16]、第 2 章を参照。

て表現するというデカルトのアイディアに基づいている。このことによって、それまでは図を見ることで直観的に理解されていた幾何学的対象の性質や関係が、数の組み合わせやその間の関係によって表わされるようになった。例えば伝統的な幾何学では二直線が平行であるということは、それらをどこまで延長しても交わることはないということである、と説明されていた。しかしながら直線を「どこまでも延長する」ということがどういうことであるのかは必ずしも明らかではない。このことは私たちの身体的経験からの類推によって直観的に理解されなければならなかったのである。一方で解析幾何学においては、直線はその意味が厳密に定義された一次関数によって表現され、2本の直線が平行であるということはそれらの関数の一次係数が等しいということによって表現される。ここで行われているのは直観的に理解されている対象を、より厳密に理解でき、より容易に取り扱える対象（ここでは実数とその間の演算や関係）に還元する、ということである。

以上から、「分析 (analysis)」という言葉は、少なくとも以下のような方法を意味していると考えられることができる。

1. ある複合的な対象を構成するより単純な要素が何であるか、それらがその対象の中でどのように組み合わせられているかを明らかにする。
2. ある事柄を成り立たせている要因や原理、基盤を明らかにする。
3. ある対象の性質や関係を、より理解しやすく扱いやすい対象の性質や関係に還元する。

このテキストではこれらをそれぞれ分解的分析、説明的分析、還元的分析と呼ぶことにしよう。

哲学における「分析」という言葉もおおよそこのような方法を意味している。ただし哲学において分析されるのは化学物質でも、飛行機事故でも、文学作品でもない。哲学が扱うのはより抽象的なものである。それは「存在」であったり、「真理」であったり、「知識」であったり、「知性」であったり、「意味」であったり、「道徳的善」であったり、「自己」であったり、そのほか様々である。哲学における分析の一つには、こういった概念を、それを構成する概念に分解することによって明らかにすることである。これは上記の1の意味の分析、すなわち分解的分析に近い。この方法は現代の分析哲学の伝統が始まる以前からもしばしば使われており、しばしば「概念分析」とも呼ばれる。例えば「知識」の概念を「正当化された、真なる信念」として定義するのが概念分析の一例である\*2。哲学における分析のもう一つの例は上記の2の意味での分析に近い。この意味での分析のモデルケースとしては、たとえばラッセルの「物質的分析」や「心の分析」を挙げることができるだろう。彼はセンスデータという単純な概念によって、いかにして物質や心のようなものが成立しうるかを示した。

しかしながら分析哲学において最も特徴的なのは3である\*3。哲学においてこれは、ある概念を含んでいる命題を、別の（より単純な、あるいは基本的な）概念を含む命題に翻訳する、という仕方で行われる。そしてその際、翻訳された後の命題はしばしば記号論理の言語によって表現されたものになる。例えば「地球の衛星は一つである」という言明は「ある  $x$  について、 $x$  は地球の衛星であり、かつ任意の  $y$  について、 $y$  が地球の衛星であるならば  $x$  と  $y$  は等しい」という言明に翻訳される。翻訳された後の言明においては「一つ」という語が出てきていない。その代わりに「ある  $x$  について...」、「任意の  $y$  について...」、「... かつ...」、「... ならば...」、「... と... は等しい」という表現が現れる。このように「一つ」という語が現れる言明を、それが現れない同値な言明に変形することで、私たちは「一つ」という概念を消去することができる。これは現代の記号論理学（特に「ある」と「任意の」という表現の導入）によって可能になった重要な進歩である。

\*2 知識の概念分析をめぐって 20 世紀の後半に行われた多くの議論については八木沢の上掲書を参照。

\*3 分析哲学と解析幾何学の方法論的類似性については Beaney [1] を参照。

分析哲学の伝統を創始したとされるフレーゲとラッセルは、同時に現代的な記号論理学の創始者でもあり、彼らの哲学的方法は記号論理学に依拠したものであった。そのために狭い意味での分析哲学は、日常言語の様々なタイプの言明を記号論理学の言語（あるいは数学の言語）に翻訳することによる還元的分析を課題とする哲学的実践を意味する。しかし現在、分析哲学という括りに包含されている哲学実践はもっと広い。より新しい分析哲学においては上記の例のどれにも当てはまらない、概念や言明の間の関係を解明することを重視する傾向が現れる。また言語や論理学そのものを研究の対象とする哲学、論理学や数学に限らず、様々な科学的知見（特に認知科学など）に哲学的問題を還元しようとする哲学なども広義の分析哲学に含まれる。さらにはいわゆる大陸哲学（現象学、実存主義など）の伝統と対置されるものとして、北米・イギリスを中心とする哲学的伝統を一括して分析系と呼んでいるように思われる場合もある。

広義での分析哲学は非常に粗い括りであり、ここに属する哲学者たちには実質的な共通点はない。そこでこの講義では主に狭義の分析哲学——すなわち論理学を使って還元的分析を行うという意味での分析哲学——に焦点を当てることにする。

## 2 初期の分析哲学者たち

この節と次の節では分析哲学がどのようにして創始され、広がっていったかを見ていこう。前節で述べたように私たちは分析哲学者と呼ばれる哲学者のすべてに注目するのではなく、主に論理学を用いた還元的分析を重視する哲学者に焦点を当てる。またここで描き出される歴史は、あくまでも著者の主観から見たものである。歴史というものは論者の数だけ存在するものであることにも注意を促しておきたい。

分析哲学は一般には19世紀末、イェーナ大学のゴットロープ・フレーゲ (Gottlob Frege, 1848-1925)、ケンブリッジ大学のバートランド・ラッセル (Bertrand Russell, 1872-1970)、同じくケンブリッジ大学のジョージ・エドワード・ムーア (George Edward Moore, 1873-1958) らに始まると言われる。特にフレーゲとラッセルは論理学を使った概念の分析という手法を創始したという点、またアリストテレス以来目立った進歩のなかった論理学に革命的な変革を起こしたという点で重要である。

フレーゲは「数とは何か？」という問題に、数詞が使われる言明（算術の命題）の意味を厳密に規定することによってアプローチした。その目的のためには、論理的で厳密な言語体系が必要であると考え、『概念記法 *Begriffsschrift*』 (1879) において形式的な記号言語の体系を構築した。これが現代の記号論理学の始まりである。その後『算術の原理 *Die Grundlagen der Arithmetik*』 (1884)、『算術の基本法則』 *Die Grundgesetze der Arithmetik*』 (1893-1903) において、算術の体系を自らの論理体系から導出することを試みている。彼はまず論理学の言語を使って二つの概念が等数性という概念を定義する。等数性は二つの概念がちょうど同じだけの対象に当てはまるということを表わす概念である。それから彼はある概念の等数であるような概念すべてを考え、それら全体がその概念の数であると定義する。このことによって彼は論理学の概念と論理学の法則から算術した。このように論理学によって数学を基礎づける試みは後に論理主義 (logicism) と呼ばれるようになる。1902年に、彼の論理体系に重大な矛盾が含まれていることをラッセルからの書簡によって知らされると、フレーゲは大きな衝撃をうけて論理主義のプログラムから手を引いてしまう。しかしフレーゲは算術の基礎づけの仕事のほかに、「意味と意義について *Über Sinn und Bedeutung*」 (1892) などの論文を著し、後世に大きな影響を与えた。

ラッセルは幼いころから数学を愛し、強い興味を持っていた。しかし彼がケンブリッジ大学に進み、数学科で幾何学を学んだときは、それが厳密でない直観的な証明に頼っていることに大きな不満を抱いたという。彼はフレーゲの論理学と、ジューゼッペ・ペアノの自然数論などに大きな影響を受け、『数学の原理 *The*

『Principles of Mathematics』(1903)を著して、数学の様々な体系を純粋な論理学の体系から導出することを試みた。しかしこの著作を執筆している途中で彼はフレーゲの体系からは重大な矛盾が導かれることを発見する。そこでラッセルはその矛盾を回避できるような新しい論理体系(タイプ理論)を考案し、ケンブリッジ大学の数学者アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド(Alfred North Whitehead, 1861-1947)とともに『プリンキピア・マテマティカ *Principia Mathematica*』(1910-1913)を著した。この三巻からなる大部の著作は、初めて論理主義のプログラムを多岐にわたる数学の分野において完遂したものであると同時に、現代的な記号論理学をテクニカルな側面と哲学的な側面にわたって体系的かつ詳細に展開したのものとして、「有史以来の偉大な知的モニュメントの一つ」(Quine [10], p. 14)と賞賛された。また彼は論文「表示について On denoting」(1905)において、記号論理学における量化の理論を応用した「記述の理論」を提唱し、確定記述句についての問題を解決しようと試みた。この理論は現代でも続く記述句の指示対象をめぐる哲学的議論の出発点となり、「分析哲学のパラダイム」と呼ばれた。『プリンキピア』執筆後、ラッセルは数学の研究からは徐々に離れ、主に認識論と科学哲学の仕事をするようになる。さらに後年になって、政治思想、教育、宗教、哲学史に関する数多くの著作を書いた。またアインシュタインらとともに反核運動を指導し、政治活動家としても名を残している。1950年には『自叙伝 *Autobiography*』によってノーベル文学賞を受賞している。分析という哲学的研究方法を明示的に打ち出し、そして一つのスタイルとして定着させたことはラッセルの功績に帰せられる。ラッセルは生涯にわたり自らの哲学的な見解を頻繁にそして根本的に変化させたことで有名であるが、しかしながら分析的アプローチを哲学的研究のスタイルとして持ち続けた点ではラッセルは一貫していた\*4。

ムーアはフレーゲやラッセルと異なり、論理学の言語への翻訳という意味での分析は行っていない。彼にとって分析とは、概念をその構成要素に分解することであった。ムーアはその主著『プリンキピア・エチカ *Principia Ethica*』(1903)において、「善」という概念の分析を試み、それがいかにして定義されうるかを問題にした。ここでの定義とは、その語の意味を規定するというのではなく、その語で意味されている対象の本質を明らかにするということである。そして彼は善の概念は分解できる部分を持たない単純なものであり、それゆえ定義不可能である、と結論付けた。善をより単純な概念によって定義する試みは成功しない。ここからムーアは、特に自然主義的な善の定義は必ず失敗する、と述べ、「自然主義の誤謬」を唱えた\*5。彼はまた認識論における「ムーアのパラドクス」を発見したことで知られている。これは「Aであるが、私はAとは信じない」という言明が、論理的矛盾ではないが真ではありえない、というパラドクスである\*6。

フレーゲ、ラッセル、ムーアらを分析哲学の第一世代とすれば、第二世代としては、ケンブリッジにおけるラッセルの学生であったルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン(Ludwig Wittgenstein, 1889-1951)、そしてイェナ大学でフレーゲの講義を受けたルドルフ・カルナップ(Rudolf Carnap, 1891-1970)が挙げられる。

ウィトゲンシュタインはもともとは機械工学・航空工学を専攻していたが、応用数学を学ぶうちにやがて純粋数学と数学基礎論に興味を持つようになった。そこでイェナ大学のフレーゲを訪ねたところ、ラッセルの下で学ぶことを勧められた。ウィトゲンシュタインはその助言に従い、1912年からラッセルの下で哲学と論理学を学んだ。この時のウィトゲンシュタインは論理学の問題とともに宗教的・倫理的問題についても深く頭を悩ませていた。第一次世界大戦が始まると彼は、イギリスと敵対する祖国オーストリアの戦線に志願兵として従軍し、ケンブリッジを離れた。この従軍の間に書きあげ、モンテ・カシノの捕虜収容所からラッセルとフレーゲのもとに送られたのが、後に『論理哲学論考 *Tractatus Logico-Philosophicus*』として出版されることになる原稿だった。この著作においてウィトゲンシュタインは論理は世界の像であり、世界の事実は命題に

\*4 ラッセルの思想における分析的手法の一貫性については Hager [7] が詳しい。

\*5 Beaney, *ibid.*

\*6 認識論におけるムーアのパラドクスの扱いについては例えば Hintikka [8] を参照。

よって完全に表現することができる」と主張した。そしてそれ以外のものは「語りえないもの」であって、それらについて私たちは「沈黙しなければいけない」（『論考』、§7）と述べた。彼は論理によって表現できない問題について語ることは無意味だと考えたのである。『論考』においてウィトゲンシュタインは伝統的な形而上学の問題をすべて無意味な言葉遊びとして一蹴し、それによって哲学の問題はすべて解決されたと考えた。その後一時期哲学の研究から離れたが、後述するウィーン学団や、『論考』の英訳者のひとりであったフランク・プランプトン・ラムジー（Frank Plumpton Ramsey, 1903-1930）との交流を経て、1929年にふたたびケンブリッジに戻り哲学の研究を再開する。彼を哲学に引き戻した直接のきっかけは1928年にウィーンで聞いたL・E・J・ブラウワーの数学基礎論についての講義だったという。ケンブリッジに戻った彼はもはや『論考』が正しいとは信じてはおらず、後に言語哲学に『論考』以上の大きなインパクトを与える新しい思想を育てることになる。後期ウィトゲンシュタインの思想については後述する。

カルナップはイエナ大学とフライブルク大学で哲学、物理学、数学を学んだ。哲学においてはフライブルクで隆盛だった新カント派の影響を強く受けて、カント『純粹理性批判』の空間論に興味を持った。一方でイエナではフレイゲの論理学とその数学への応用についての講義を受けた。彼は物理学的時空論の公理化についての博士論文を書いた後、ライヘンバッハの紹介でウィーン大学のモーリツ・シュリック（Moritz Schlick, 1882-1936）と出会い、ウィーン学団との交流を始める。ウィーン学団はフレイゲやラッセル、ウィトゲンシュタインらの影響をうけ、論理的な手法と徹底した経験論によって自然科学を基礎づけることを目指す**論理実証主義**（logical positivism）を掲げていた。主なメンバーには他にハンス・ハーン、オットー・ノイラートなどがいる。また学団のメンバーではないが、親交のあった人物としてはクルト・ゲーデル、アルフレド・タルスキが挙げられる。論理実証主義者たちは、科学的な言明とは経験によって検証されうる言明であり、そうでない言明は無意味であると主張した。カルナップはウィーン学団の中心的なメンバーとして、論理実証主義の立場を追求しながら、フレイゲ、ラッセルの論理主義を発展させ、さらには様相論理、確率論などの分野においても重要な仕事を残した。

これらの初期の分析哲学者たちに共有されていたのは、「世界は合理的に理解することができる」という西洋近代の合理主義的信念と、「世界は単純な要素から構成されており、私たちはそれを直接的な経験によって知ることができる」という原子論的な存在論・認識論である。もちろん彼らは、古典的な合理主義者のように理性が世界についての知識のすべてを供給する、とは考えていない。しかし数学的（算術的）真理は論理に還元でき、それゆえにア・プリオリだと述べる時、フレイゲやラッセルは明らかに合理主義者である。ウィトゲンシュタインはそれを哲学全般に拡張し、論理的に語るができないものについて語る哲学はまやかしであると断じた。またラッセルは記述の理論において、私たちの知識は究極的にはセンス・データという、それ以上単純なものに分析できない知覚に還元される、と論じた。ウィトゲンシュタインも、世界を構成する事実はそれ以上単純なものに分析することができない要素命題の総体によって完全に記述されると考えた。論理実証主義者たちは、経験や観察に直接に対応する（それゆえ経験や観察によって検証できる）**プロトコル命題**が科学理論の基礎であり、これに基づかないような言明は無意味である、と考えた。

論理という無謬なるものによって数学を基礎づけ、それを経験論と結び付けて自然科学をも基礎づけようとしたのが初期の分析哲学者たちであった。そしてそのために、論理によって捉えられないもの——感情などの不合理なもの、神や絶対者などの超越的なもの、魂や霊などの神秘的なもの——を彼らは徹底的に排除してきた。ここに現代哲学における二つの大きな流れを分けた分水嶺がある。その分離はラッセルとムーアが観念論的一元論に背を向けたときに始まり、ウィトゲンシュタインとカルナップが伝統的な形而上学を強く拒否したときに決定的なものとなる。彼らが合理的に世界を理解する方向を追求する一方で、理性の限界を認識し、理性による理解やコントロールの及ばない状況の中に置かれた人間存在の在り方、人間と世界の関わり方を探求

したのがハイデッガーに代表されるいわゆる大陸哲学 (continental philosophy) である\*7。分析系と大陸系という二つの哲学の分断は 20 世紀を通じて維持された。分析系の伝統に連なる哲学者たちは、あくまでも合理性や論理を重んじ、それによって捉えられないものを排除する。彼らは特定の科学の分野の問題を厳密に捉えようとする一方で、倫理的な問題や形而上学的な問題には進んでコミットしようとしなない。これに対して大陸系の伝統に連なる哲学者は、合理的に捉えられないものをこそ重んじ、人間の生や社会の現実に積極的にコミットする。もちろん歴史というものはこれほど単純な図式ですべてが捉えられるものではない。分析系と称される哲学者の中にも様々なニュアンスがある。そのような分析哲学の多様化、拡散は 1930 年代から顕著になっていく。

### 3 分析哲学の変容

上述したように、初期の分析哲学者たちを支えた信念の一つは合理性、特に論理学の確実性に対する信念と、世界は単純な要素によって構成されており、それは私たちの経験によって確かめられるという原子論的経験論であった。しかし 20 世紀の前半、特に 1930 年代にこういった信念を揺るがすことが立て続けに起こる。そしてそのことによって初期の分析哲学者の持っていた強い意味での還元主義は維持されなくなっていく。その代わりに現れたのは、日常的な言語活動の多様性を反映して論理もまた多様なものであるとする態度、あるいは論理よりも日常言語そのもの重視する態度である。この節では初期の分析哲学者の信念がどのようにして揺るがされたのか、そしてまた新しくどのような態度が生まれてきたのかを見る。

フレーゲとラッセルの論理体系はその形式化という点においては必ずしも十分ではなかった。現代の記号論理学においては、そこで扱われる言語は完全に人工的な記号体系として形式化されている。このような言語を定める諸規則の体系は構文論 (syntax) と呼ばれる。また現代の論理学では、このようにして定められた形式言語に対して、記号を操作し定理を導出するための諸規則の体系と、記号に意味を与えるための諸規則の体系が別々に与えられる。これらの体系はそれぞれ証明論 (proof theory) および意味論 (semantics) と呼ばれる。しかしフレーゲとラッセルの論理体系では言語の形式的な定義、すなわち正式な構文論は与えられておらず、そのために証明論や意味論も必ずしも現代の論理学のように明瞭でも厳密なものではなかった。また彼らの体系はどちらも現代でいう高階論理であり、対象と概念などが曖昧な仕方と同じように扱われていた。こういった欠点を修正し、より洗練された記号論理学を構築する試みが 1920 年代から 1930 年代にかけて盛んに行われた。ダーフィット・ヒルベルト (David Hilbert, 1862-1943) とパウル・ベルナイス (Paul Bernays, 1888-1977) は一階述語論理の標準的な体系を定式化した。アルフレド・タルスキ (Alfred Tarski, 1902-1983) は論理的言語に関する指示・充足・真理などの概念を定式化し、これらに基づいた形式意味論の方法を確立した。ゲルハルト・ゲンツェン (Gerhart Gentzen, 1909-1945) は自然演繹とシーケント算という現在でも最もメジャーな証明論の体系を考案した。

ヒルベルトの目的は数学を形式化することによって、数学に確固たる基礎を与えることであった。記号という具体的で、かつ直観によって認識できる対象から始めて、明示的に述べられた公理と推論規則のみによって数学のすべてのが導出できるのであれば数学についての認識論的な問題は解消されるだろう、そしてその形式的体系が無矛盾であるならば数学の安全性も保証されるだろう、とヒルベルトは考えたのである。しかしそのためには本当にその形式的体系が無矛盾であることを証明しなければならぬ。しかもそれを証明す

---

\*7 マイケル・フリードマンは、1929 年のダボス大学におけるハイデッガーとカッシーラーの討論 (そこにはカルナップも出席していた) に焦点をあてて、ハイデッガーとカルナップの両者がともに新カント派への否定的な反応の結果として極端に異なる哲学を発展させることになった、と論じている。Cf. Friedman [6].

際には、当の形式的体系よりも強い（多くのことが証明できる）体系を使ってはならない。果たしてそんなことが可能なのだろうか。可能ではなかったのである。それを明らかにしたのが、クルト・ゲーデル（Kurt Gödel, 1906-1978）が1931年に発表した不完全性定理である。

直観的に言えば、この定理は算術の形式的体系が無矛盾であれば、その体系では証明も反証もできない算術的命題が存在する、ということの意味している。特にゲーデルがその反例として構成した命題は、直観的には正しいことを表現しているように思われるため、形式的体系では証明できない正しい算術の命題が存在する、と考えられたのである。さらに悪いことにこの定理からは、ヒルベルトが考えていたような数学の無矛盾性証明が不可能だという帰結が導かれる。ゲーデルの結果は数学基礎論、数理論理学に非常に大きなインパクトを与えた。これによって形式的な体系によっては数学のすべてを捉えることも、数学の無矛盾性を証明することもできないということが分かったのである。

同じころ、形式的体系の限界を示す結果が他にも発見されている。例えば一階述語論理の決定不可能性（一階述語論理の定理か否かを判定する機械的な手続きは存在しない）、チューリング・マシンの停止問題（あるプログラムの実行が正常に終了するかどうかを判定するプログラムを書くことはできない）、真理の定義不可能性（形式的体系において「 $p$ は真である」という述語を定義することはできない）、などである。これら一連の結果は明示的な規則に従った推論や計算というものには必ず限界があるという、合理主義者にとっては都合の悪い帰結を持つ。

もう一つ、初期の分析哲学に対する重要な反応は、フレーゲやラッセルらの論理体系に対する様々なオルタナティブが提案されたことである。フレーゲらの論理体系は現在では古典論理（classical logic）と呼ばれるものであり、これは数学における推論を形式化することを第一の目的として作られている。しかし古典論理においては正しい推論であるが、それを適用するのが不適当に思われる場面がしばしばある。そういった問題に対する反応として、20世紀の初頭から古典論理とは異なる論理体系が提案されてきた。それらは総称して非古典論理（non-classical logics）と呼ばれる。オランダの数学者でヒルベルトの論敵であったL・E・J・ブラウワー（L. E. J. Brouwer, 1881-1966）による直観主義論理や、ポーランドの論理学者ヤン・ウカシェヴィチによる3値論理などはその最も初期の例である。またアメリカのC・I・ルイス（Clarence Irving Lewis, 1883-1964）は古典論理の実質含意が通常の意味での含意とは著しく異なっていると考え、より通常の意味に近い厳密含意の概念を様相論理（modal logic）に基づいて提案した。様相論理とは、命題の真偽のみならず、その真偽が必然性や可能性を表現することが可能な論理体系である。厳密含意は直観的には「 $A$ ならば $B$ だ、ということは必然的である」を意味する命題であり、これによって実質含意では成り立つ不自然な条件文が排除される（ただし厳密含意にも直観に反する事例はある）。

このような論理学の形式的洗練や多元化はやがて、論理学を人間の認識の基礎をなすもの、あるいは世界の構造を反映するものとみなす態度から、何らかの特定の領域をモデル化するものとみなす態度への変化をもたらした。そして種々の論理体系それ自体の性質、あるいはそれらの間の関係を研究することが論理学の主題となっていく。このことは論理学を最も普遍的な学問と考えるフレーゲやラッセルにとっては受け入れがたいものだったかもしれない。上記のように論理学の確実さへの信頼が初期の分析哲学を支え駆動してきた原動力の一つだったからである。しかしながらこのような論理学の洗練と多元化は分析哲学にも豊かな実りをもたらした。特に様相論理と、60年代に確立したその可能世界意味論は、多くの分析哲学者にとって不可欠の道具になっている。

一方、初期の分析哲学を特徴づけたもう一つの教義、経験主義に対してはさらに否定的な反応が現れた。1934年にはオーストリア出身の科学哲学者カール・ライムント・ポパー（Karl Raimund Popper, 1902-1994）は『科学的発見の論理 *Logik der Forschung*』を出版し、そこで帰納主義と論理実証主義を批判した。ポパー

によれば、科学理論は経験によって検証されることはなく、ただ反証される可能性があるのみである。例えば「いかなる物体も光より速く移動することはない」という言明を考えよう。どれほど多くの観察を重ねてもこの言明が証明されることはない。しかしもし光よりも速く移動する物体が観測されれば、この言明は直ちに反証される。それゆえ、経験による検証可能性を科学的言明（あるいは有意味な言明）の条件とする論理実証主義は誤りである、とポパーは主張する。また彼は実験や観察からの帰納的推論による一般化という、ベーコンやミルなどの帰納主義的科学モデルに反して、科学者の直観的なひらめきと観察による反証という、という新しい科学モデルを提案した。

政治的・社会的情勢もまた論理実証主義に試練を与えた。ナチスの台頭によるドイツ周辺の政情の不安定化は、ウィーン学団の多くのメンバーの国外への流出をもたらした。カルナップは1935年にアメリカに渡り、翌年シカゴ大学の教授に就任する。オットー・ノイラートはモスクワ赴任中に、危険を知らせる手紙を受け取り、最初はオランダに、後にイギリスに亡命する。ハンス・ハーンは1934年に病気の治療のために受けた手術の後に死亡する。学団のリーダーであったシュリックは1936年に元学生によって暗殺され、非業の死を遂げる。このようにしてウィーン学団は相次いで主要なメンバーを失い瓦解する。また学団と親交のあったゲーデルやタルスキもこの時期に相次いでアメリカに移住している。

さて同じ頃、ケンブリッジでは相変わらずラッセルにならって論理的な分析を重視する哲学者たちが多かったが、オックスフォードでは、日常言語の表現や使用法そのものを重視する新しい傾向が生まれていた。ギルバート・ライル（Gilbert Ryle, 1900-1976）は特定の表現形式に特権的な地位を与え、その表現に他の表現を還元するという初期の分析哲学者の好んだ方法を捨て、様々な言語表現の間の関係を研究し「概念の地理」を研究するというスタイルをとった。ジョン・ラングショー・オースティン（John Langshaw Austin, 1911-1960）は言語を用いることによって私たちが行う行動（言語行為）に注目し、形式的な側面に注目する以前の言語哲学とは異なる言語理論を展開した。ライルの後任としてオックスフォードの哲学教授を務めたピーター・フレデリック・ストローソン（Peter Frederick Strawson, 1919-2006）もまた日常言語の語用論を重視して、ラッセルの記述句の分析を批判した。G. Ryle, J. L. Austin, P. F. Strawson

形式論理より日常言語そのものを重視する傾向は、1930年代以降のウィトゲンシュタインにおいても顕著である。このころから彼は『論考』に展開された自らの言語理論とは正反対の言語理論を発展させるようになった。上述のように『論考』において彼は、言語にはそれ以上単純な要素に分析できない要素命題が存在し、そしてすべての命題は要素命題の真理関数である、という原子論を採っていた。原子論によればすべての文の真理は、要素命題の真偽から論理的な計算によって決定される。ここでは命題は抽象的な対象として扱われ、実際にそれが使用される文脈や、それを使用する人間の目的などは考慮されない。これに対して後期のウィトゲンシュタインは、言葉の意味は形式的な意味論によって決定されるのではなく、使用される場面でそれが果たす役割から決定されるという、いわゆる意味の使用説を唱えた。それを端的に表現したのが、後期ウィトゲンシュタインを代表する著作『哲学探究 *Philosophische Untersuchungen*』（1953）の中の「語の意味は言語におけるその使用である」（§43）という主張である。言語が使用される場面は様々であり、おなじ言葉でも異なる場面では異なる使用を持つ。ウィトゲンシュタインは言語が使用される様々な場面を言語ゲームと呼び、そして同じ言葉でも言語ゲームが異なれば、異なる意味を持ちうると主張した。また言語ゲームは非常に多種多様であり、言語ゲーム一般を定義できるような一つの定義は存在しない。従って言語の使用を支配する一般的法則もまた存在しない。このように後期ウィトゲンシュタインは体系だった言語理論を構築することに対して強く否定的であった。そして彼が何よりも強く反対したのが『論考』の言語理論である。彼は哲学の役割は体系だった理論をドグマティックに与えることではなく、言語の混乱が生じているときに、それを治療することにある、と考えている。

初期の分析哲学に対する決定的に重要な批判者はアメリカのウィラード・ヴァン・オーマン・クワイン (Willard Van Orman Quine, 1908-2000) である。カルナップがウィーンにいた当時、クワインは彼を訪ねており、カルナップがヨーロッパからアメリカに移住する際にはクワインがその手助けをした。また思想的にもクワインはカルナップから大きな影響を受けたのであるが、結果としてクワインはカルナップと論理実証主義に対する最も決定的な反論（と今では見なされている議論）を提示することになった。彼は論文「経験主義の二つのドグマ (Two dogmas of empiricism)」(1951)において、分析判断と総合判断とが必ずしも明確に区別できないということ、および個々の命題は経験によって真偽が決定できるものではないということなどを主張した。これらの主張が認められるならば、初期の分析哲学者たちの目指した還元主義的プロジェクトの遂行は不可能であることになる。

分析哲学の歴史におけるクワインの影響は非常に大きい。クワイン以降、私たちの知識が堅固な基礎によって保証されるという還元主義はもはや維持されず、私たちの知識はあくまでも何らかの理論体系に相対的にのみ真であり、そしてそれぞれの理論体系はそれぞれに真理を持つという相対主義が一般的になる。さらにクワインの提唱した自然化された認識論は後の認識論の方向性を決定づけた。クワインの言う自然化された認識論とは、簡単に言えば、外部世界から私たちが受け取る感覚刺激からどのようにして私たちの知識が形成されていくかということ、自然科学に即して説明することである。20世紀後半以降の認識論はほとんどこのような方法論に基づいて行われており、哲学によって自然科学や数学を基礎づけるというような目標は掲げられなくなった。

## 4 分析哲学の現在

20世紀後半、分析哲学は大きく多様化する。日常言語の論理学への還元という意味での分析哲学に対しては、1930-50年代には否定的な反応が目立っていたが、1960年代にソール・クリプキ (Saul Kripke, 1940-) が様相論理に対する可能世界意味論の枠組みを確立し、それをを用いて固有名や同一性についての分析を与えたことはこの意味での分析哲学の復興に大いに寄与した。可能世界というアイディアは非常に強力なものであることが分かり、これに基づいて同一性、因果性、存在、時間、義務、認識などについての重要な理論が立てられた。現代においてこの伝統を継承している哲学者にグレアム・プリースト (Graham Priest, 1948-) がいる。また可能世界という道具立てそのものがデイヴィッド・ルイス (David Lewis, 1941-2001) などによって哲学的な考察の対象となり、時間論なども組み合わせられて分析形而上学という新しい分野の隆盛を招いた。

クワインの自然化された認識論に影響を受けた哲学者たちは、様々な自然科学の成果を用いて、私たちの認識や心がどのように成り立っているかという哲学的な問題にアプローチするようになった。特に心の哲学に従事する哲学者たちは認知科学、神経科学、進化生物学、人工知能、ロボティクスなどの分野で得られた知見に基づきながら、巧妙な思考実験を駆使して、認知や精神などの問題にアプローチする。また自然主義のアプローチは認識論だけではなく、他の科学哲学の諸分野にも応用されている。

オックスフォードの日常言語学派や後期ウィトゲンシュタインに影響を受けた人々は、論理学に特権的な地位を与えることをせず、日常言語をその実践における使用の場面において考察するという方法論を重視する。この伝統に連なる哲学者たちは、言語とその意味を抽象的な仕方では取り扱うことをせず、あくまでも社会における実践的な活動として言語を捉える。

私たちの認識を論理と経験主義によって基礎づけるという、初期の分析哲学者たちが目指した目的は果たされることはなかったが、しかしその挫折ゆえに分析哲学はその後の多様な発展を促したともいえるだろう。

## 参考文献

- [1] M. Beaney. Analysis. In E. N. Zalta, editor, *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*. Summer 2011 edition, 2011.
- [2] G. Frege. *Grundlagen der Arithmetik*. Georg Olms Verlag, Hildesheim, 1990.
- [3] G. Frege. Über Sinn und Bedeutung. In I. Angelelli, editor, *Kleine Schriften*, pages 143–162. Georg Olms Verlag, Hildesheim, 1990.
- [4] G. Frege. *Begriffsschrift und andere Aufsätze*. Georg Olms Verlag, Hildesheim, 1998.
- [5] G. Frege. *Grundgesetze der Arithmetik I/II*. Georg Olms Verlag, Hildesheim, 1998.
- [6] Michael Friedman. Carnap, Cassierer, and Heidegger: The Davos disputation and twentieth century philosophy. *European Journal of Philosophy*, 10:263–274, 2002.
- [7] P. J. Hager. *Continuity and Change in the Development of Russell's Philosophy*. Kluwer Academic Publishers, 1994.
- [8] J. Hintikka. *Knowledge and Belief: An Introduction to the Logic of the Two Notions*. Cornell University Press, Ithaca, N. Y., 1962.
- [9] W. V. O. Quine. Two dogmas of empiricism. *The Philosophical Review*, (60):20–43, 1951.
- [10] W. V. O. Quine. Whitehead and the rise of modern logic. In *The Ways of Paradox and Other Essays*, pages 3–36. Harvard University Press, revised and enlarged edition, 1997.
- [11] B. Russell. *The Principles of Mathematics*. Routledge, London, second edition, 1992.
- [12] B. Russell. *Autobiography*. Routledge, London, 2000.
- [13] A. N. Whitehead and B. Russell. *Principia Mathematica*, volume 1. The Syndics of the Cambridge University Press, Cambridge, second edition, 1927.
- [14] L. Wittgenstein. *Tractatus Logico-Philosophicus*. Routledge and Kegan Paul LTD, London, 1971.
- [15] L. Wittgenstein. *Philosophical Investigations*. Blackwell, Oxford, 1997.
- [16] 敬 八木沢. 分析哲学入門. 講談社, 2011.